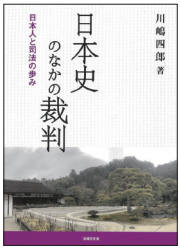
※著者の所属・職名は執筆時のものです。



法律文化社
2,860円（税込）
刊行日 2022年10月

日本史のなかの裁判
日本人と司法の歩み

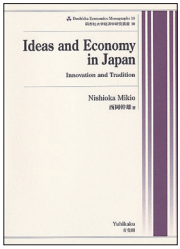
川嶋四郎（大学法学部教授）著

古代から現代に至る日本史に現れた様々な「裁判」を取り上げた。歴史上、日本人の正義と公正への思いを知ることにより、法や裁判を身近に感じ、自分たちのものとして学び活用することを企図している。民事訴訟法の教育研究者として、こんなに面白く魅力的で有益な学問分野が、「民訴＝眠素」などと揶揄される学びの現況を、多少とも改善できればという思いもあった。

たとえば、名もなき多くの庶民のほかに、聖徳太子、鬼室集斯、山上憶良、東大寺春豪房、北条泰時・時頼、阿仏尼、青砥左衛門、朝倉孝景、北条早雲、六角義賢、石田三成、中江藤樹、熊沢蕃山、荻生徂徠、大岡忠相、井原西鶴、朝日文左衛門、遠山金四郎、江藤新平、新島襄、福沢諭吉、児島惟謙、田中正造、原敬、夏目漱石、雉本朗造、永井荷風、宮澤賢治、宮本常一、D・キーン、司馬遼太郎、三島由紀夫、饗庭孝男などに登場いただいた。また、日本の司法のために、C―L・モンテスキュー、J―J・ルソー、H・ソロー、V・ユーゴー、C・ディケンズ、U・グラント、J・ホイジンガ、L・トルストイ、I・バード、G・ボワソナード、H・ベルツ、F・カフカ、G・オーウェル、E・H・カーなどの言葉も借りた。

SDGs.16（平和と公正をすべての人に）が提言される遙か前から、私は手続的公正を探求しつつ研究を進めてきた。「権利」保護が訴訟目的とされる学の世界で、誰一人取り残さない法による「救済」を基軸に研究を重ねてきた。ただ、「正義と公正」を旨とすべき「司法制度」への強い関心から、陪審裁判や大逆事件等の刑事分野についても言及した。現代民事訴訟法における最先端の議論や手続についても論じているので、法を学ぶ学生たちだけではなく、広く一般の方々や法曹にも本書をお勧めしたい。

著者より



有斐閣
6,160円（税込）
刊行日 2022年6月

Ideas and Economy in Japan
Innovation and Tradition

西岡幹雄（大学経済学部教授）著

本書は、これまでの経済学の歴史や思想の理解が英米欧軸に偏っていた面を踏まえて、日本の思想と経済からの発信と問いかけを行っています。シカゴ大学のテツオ・ナジタ教授をはじめ、数多くのジャパノロジストが膨大な研究の集積を為してきましたが、日本の思想と経済を中世末から近世近代までのつながりの中で、単著として包括的に究明した英文文献はほとんどありませんでした。

本書の構成は、近世から近代にかけての代表的な政治経済思想家、伊藤仁斎、太宰春台と荻生徂徠、本多利明、中井竹山、小西惟冲、横井小楠、福澤諭吉・田口卯吉ら、そして関一の「大大阪」と都市社会経済政策などの視野から、地域と日本における持続的かつ安定的な成長と「厚生」との具体像を明らかにしました。

本書の展開を通じて、日本の経済思想は一貫して、個の「利」と、日本の社会、領域全体（「天下国家」）の「公益」とを調整しつつ、社会階層間の円滑な平準化を図るための制度化への構想を明らかにしています。日本が直面してきた社会経済のリスクと不確実性の克服、諸資源の偏在、合理的認識に要する時間、期待などに起因する矛盾、そして社会を支える内部組織と外部構造、およびその基盤を制御して解明することが、〝日本の経済思想における革新と伝統〟として、情勢が目まぐるしく変化する中にあっても、持続的で安定的な成長と革新の基本設計となるでしょう。

著者より

中央経済社
2,860円（税込）
刊行日 2022年7月

幸福感と年金制度

佐々木一郎（大学商学部教授）著

日本の幸福感は、主要先進国の中で低い水準にある。また、多くの人々が老後生活資金の二千万円不足の不安をかかえている。なぜ、世界屈指の健康長寿国であり、皆保険、皆年金制度が整備されているにもかかわらず、幸福感は低く、老後経済不安も高いのであろうか。どのような年金制度にすれば、幸福感を高めることができるのであろうか。

年金制度は複雑で分かりにくいにもかかわらず、学校教育や会社で学習する機会は殆どなく、年金リテラシー不足になりやすい。

本書は、年金リテラシー不足に注目し、筆者が独自に考案したアンケート調査データを用いたうえで、年金制度は幸福感と顕著な関係があることを明らかにしている。

また、本書の分析結果から、七十歳年金繰下げ受給による年金増額や、免除・納付猶予制度など、家計が年金制度を十分に使いこなせていない実態が示された。幸福感を高めるためには、年金リテラシー向上、年金制度の有効活用、低年金の予防が重要であることが示唆された。

高齢者世帯の平均では、老後収入源の約六割は、公的年金収入で支えられている。高齢就労収入は、約二割にとどまり、株式配当・銀行預金利息による収入等はさらに少ない。老後生活資金に不安があれば、若年層や中高年層にとっても、安心で豊かな将来を確信することは難しい。

公的年金制度は、老後の年金保障だけではなく、障害年金や遺族年金の保障もある。生涯で総額いくら負担し、総額いくら受給が見込めるのか、免除・納付猶予制度の効用とリスク面など、年金リテラシーを向上するための年金教育の推進が今後いっそう重要である。

著者より

英宝社
3,960円（税込）
刊行日 2022年6月

イギリス湖水地方 モアカム湾の光と影

臼井雅美（大学文学部教授）著

イギリス湖水地方の南に位置するモアカム湾は、湖から流れ出る河川により大きくコの字に形成されたイングランドで二番目に大きな干潟である。命の危険を冒してでも、その干潟を渡って中世の時代から修道僧も商人たちも旅をした。そこには中世から現在に至るまで、過酷でありながらも豊かな自然と歴史と物語がある。ターナーが愛して水彩画で描いた風景には、モアカム湾の光と影がすでに示唆されていた。

十九世紀の産業革命によりモアカム湾沿岸に点在する小さな村々やマーケットタウンはリゾート開発と資源開発に沸く。ヴァイキング遺跡や中世の修道院跡が残り豊かな自然を残すモアカム湾沿岸の寒村を繋ぐように鉄道が敷かれ、それらの村々にはマンチェスターなどからやってきた中流階級の人々の屋敷やホテルなどの観光施設が建てられていった。ザルガイやエビ漁業や小規模な銅や鉄、石灰石などの鉱石の採掘で支えられていた地元の経済は大きな転機を迎えた。各地に大規模な採石所ができて、湾の北先端のファーネスには鉄鋼採掘業、製鋼業や造船業が興り、労働者が国内外から移り住み人口が急増した。

しかし、第二次世界大戦中には軍の駐屯地や疎開地となり、モアカム湾沿岸は戦後の観光業と産業の復興の中で徐々に落ち込んでいき、十九世紀の栄華のみが残る地域となってしまった。そして、南の先端ヒーシャムには原子力発電所が建設され、イギリスの核政策に利用される。

豊かな自然が残るモアカム湾の光と影は、イギリスの光と影であり、現代においてモアカム湾は新たな道を模索しているのである。

著者より

東京化学同人
1,320円（税込）
刊行日 2022年5月

桝 太一が聞く 科学の伝え方

桝（ます）太一（たいち）（大学ハリス理化学研究所助教）著

この本は、私が同志社大学で「サイエンス・コミュニケーション」の研究と実践に取り組もうとするにあたり、まずはその実状と課題を探るべく科学に携わる様々な人たちにインタビューをしていった、いわば〝取材記録集〟です。取材は今もまだ続いていて、今回はあくまでその第1弾。ですから、今の時点ではまだ明快な答えや結論を提示しているものではなく、むしろ生々しい取材の過程を見ていただき、皆さんも一緒に考えてみませんか、というコンセプトの本だと思っています。まだ耳慣れない言葉であろう「サイエンス・コミュニケーション」は、端的に言うと「科学に関する、あらゆる意思疎通」。しかし一口にそうは言っても、誰と誰の間で、どういう科学を、どんな手段で、何のために…と考えていくと、そのかたちは実に多様で、現場の数だけ、人の数だけ課題が存在していると言って過言ではありません。実際、1冊目の今回は研究者を中心にインタビューしていますが、皆さんに「科学の伝え方」というテーマを投げかけると、驚くほど多くの言葉・強い思いが返ってきました。科学の現場で、いかにサイエンス・コミュニケーション上の課題が多いか、解決が強く求められているか、感じずにはいられませんでした。今後も、科学に関するあらゆる分野・立場の人たちへとインタビューを広げていく予定です。ぜひ、第2弾・第3弾にもご期待下さい。

著者より

小鳥遊書房
2,900円（税込）
刊行日 2022年5月

英国若者文学論
国家が拡張をあきらめたとき、若者はどのように大人になっていくのか

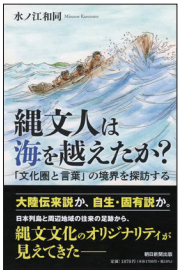
川島健（かわしまたけし）（大学文学部教授）著

英語圏において「若者」は比較的最近生まれたカテゴリーです。むろんそれ以前に若者がいなかったというわけではありません。大人の時間と子どもの時間が切り分けられ、その端境期が子どもが大人へと成長するための特別な時間として意味づけられたのが、19世紀後半から20世紀初期にかけてのことなのです。時は大英帝国の最繁栄期。拡張する領土を管理する人材育成が急務となり、健康で聡明な若者を育てる必要に迫られ、若者にかんする法や教育制度が整えられました。その結果、「青春（youth）」「思春期（adolescence）」「若年成人（juvenile-adult）」などの言葉が生まれました。

「若者」の誕生は新しい文学を生み出します。ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』（1883）などの海洋冒険小説です。少年たちの無人島の冒険は、領土拡張する大英帝国の欲望を反映したものです。未開の地を探検する少年たちは植民地主義の先鋭部隊であったのです。20世紀初頭から大英帝国の拡張主義には陰りがみえ始めます。それと歩を合わせるようにして、文学は屈折した青春を描くようになります。J・M・バリー『ピーター・パン 大人にならない少年』（1904）はその典型です。以後の英国文学において、屈折した青春、大人になり切れない大人は一大テーマになっていきます。

若さと成長は常にモデルを必要とします。そのモデルが見当たらないとき、人はどのように大人になっていくのでしょうか？こんなことを考えながら、19世紀末から1960年代までのイギリスの文学作品を読んでみました。若さを持て余している皆さん、ぜひご一読ください。

著者より



朝日新聞出版
1,870円(税込)
刊行日 2022年4月

縄文人は海を越えたか?
「文化圏と言葉」の境界を探訪する

水ノ江和同（大学文学部教授）著

縄文文化（約15，000年前～2，700年前）といえば、火焔土器に代表される造形的に優れた縄文土器、女性の多産・安産の象徴とされる土偶、美しい緑色のヒスイ製アクセサリーなどを思い起こす。世界史的にみても、日本列島の縄文文化は質・量ともに他地域の文化を凌駕する。このことは、2021年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された事実からも、世界が認めるところとなった。

この縄文文化の範囲は現在の日本の国土にほぼ相当し、北は宗谷海峡と択捉海峡、伊豆諸島では八丈島、西は対馬島（対馬海峡西水道）、南は沖縄の久米島までとなる。サハリン（樺太）までは約40㎞、韓国の釜山までは約48㎞。天気の良い日は対岸の島影が見える近い距離である。しかし、サハリンや韓国には縄文土器や土偶やヒスイ製アクセサリーなど、縄文文化を象徴する考古資料はほとんど見当たらない。

ただし縄文文化にはごく一部であるが、石で作った耳飾（玦状耳飾）、軸部と針部を組み合わせて作る大型の釣針（結合式釣針）、薄い板状の石材を擦り切って作った磨製石斧（擦切石斧）など、広く東アジア一帯にも分布して類似した考古資料もある。渡航手段としては丸木舟しかない当時、日本列島の縄文文化と周辺地域との関係性がどのような内容だったのか。ロシア極東と朝鮮半島の考古資料との丹念な比較検討から、その実像に迫る。

著者より

新潮新書刊
836円(税込)
刊行日 2022年4月

日本人の承認欲求
―テレワークがさらした深層―

太田肇（大学政策学部教授）著

だれにも備わっている承認欲求。しかし、その表れ方は当人が置かれている環境によって異なります。コロナ下のテレワークによって、日本人独特の表れ方が浮き彫りになりました。

半ば緊急避難的にテレワークが取り入れられた当初は、通勤の負担が減り、私生活とも両立しやすくなるなど歓迎ムード一色でした。ところがしばらくたつと、目の前に部下がいないことを嘆く管理職や、上司・同僚から認められないと不満をうったえる若手社員が増えてきました。そしてコロナの流行が一息つくと、経営幹部たちは待ちかねていたように元の出勤体制に戻そうと動き出しました。それぞれが承認欲求を満たす場として、職場がいかに大切だったかに気づいたのです。

日本人にとって会社は単なる働く場所ではなく、コミュニティ（共同体）としての側面も備えています。そのため会社のなかで全人格的に承認されることを期待するのです。働き方改革を進めるうえでは、この点も見逃してはなりません。

とはいえ多くの人がテレワークを経験し、その便利さを知った以上、毎日みんなが一堂に会して働くという常識は徐々に崩れていくでしょう。その代わりにネットを介して社外の人とつながりができ、地域の人とも交流しやすくなるはずです。そうなれば承認欲求を満たすうえで会社に依存せずにすみ、多様な視点から個性や能力を認められるチャンスが広がります。本書では新たな働き方の実例を盛り込みながら、日本人の「心の世界」がどう変わっていくかを展望してみました。

著者より

みすず書房
4,181円（税込）
刊行日 2022年4月

居場所なき革命
フランス1968年とドゴール主義

吉田徹（大学政策学部教授）著

1960年代は、現代のリベラル政治の源泉ともなる「政治」の季節でした。アメリカの公民権運動、日本の安保闘争、中国の文化革命、各国でのベトナム反戦運動等々。その中でも、日本でもよく知られているのは「カルチエ・ラタン」（パリ五区の市街）という言葉とともに有名になったいわゆる「5月革命」でしょう。フランスでは単に「68年5月」という年月日で呼ばれますが、それも国民的な集合的記憶であることの証左でもあります。

近い歴史でもあるため、「5月革命」については、当事者たちの証言やそれらの研究は膨大な数にのぼります。もっとも、それゆえにこの「革命」が、戦後解放の父であり、時の大統領でもあったシャルル・ドゴールの翌年4月の退陣にどのようにつながったのかについては、本国でもあまり焦点に据えられることはありませんでした。戦後ベビーブーマーが中心となった未曽有の学生運動がなぜ起きたのか、無理解なままだった19世紀生まれの稀代の政治家は、伝家の宝刀である国民投票に打って出て、否決されたことで長年の政治キャリアに幕を下ろすことになります。

この国民投票で、ドゴールが問うたのは国民の能動的で自主的な政治参加でしたが、当の学生・労働運動が求めたのは、憲法改正を伴うそのような「上からの革命」ではありませんでした。その一方で、「5月革命」が目指した精神的・道徳的革命もまた、既存の政治や国家の中で貫徹することはありませんでした。その意味において、フランス現代史で欠かすことのできない2つの固有名詞が目指した革命はともに居場所を見つけられなかったというのが本書の見立てとなります。

著者より

法律文化社
3,190円（税込）
刊行日 2022年4月

アメリカ多文化社会論［新版］
「多からなる一」の系譜と現在

南川文里（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

アメリカ合衆国のモットーとして知られる「多からなる一（e pluribus unum）」という言葉がある。異なった背景を持つ人びとによって構成されるアメリカ社会の理想をあらわしたものとされているが、アメリカ合衆国の歴史は、「多」からいかに「一」を導き、「一」のなかでいかに「多」を認めるかをめぐる葛藤の連続であった。本書は、「多からなる一」の理想がどのように描かれ、それを体現するための制度がどのように作られてきたのかを、思想、社会運動、政策形成の相互作用のなかに描いたものである。

本書の内容は、著者が大学や大学院で行ってきた講義にもとづいている。この新版では、初版刊行後に注目を集めたトランプ政権の誕生やブラック・ライヴズ・マター運動の広がりなどをふまえて、全面的な改訂を行った。現代アメリカ社会は、白人優越主義的・排外主義的な態度を隠さないトランプ主義の登場と、新型コロナウイルス危機のなかで表面化・深刻化した人種的不平等という危機に直面している。この危機のなかで、20世紀後半に登場した多文化主義的な運動や政策が、どのように変化しつつあるのか。本書では、近年の人種エスニシティ研究や移民研究の成果をふまえ、この問いを「多からなる一」をめぐる葛藤の歴史のなかに追究した。その軌跡は、変化を続けるアメリカの現在をつかむだけでなく、多文化社会としての日本を考えるための参照枠としても重要であろうと考えている。

著者より

ミネルヴァ書房
4,950円（税込）
刊行日 2022年3月

市場と共同性の政治経済思想

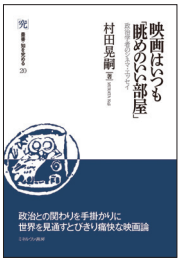
小島秀信（こじまひでのぶ）（大学商学部准教授）著

本書『市場と共同性の政治経済思想』は、私にとって二冊目の単著である。前著はエドマンド・バークという18世紀の政治家・政治哲学者の政治経済観をかなりピンポイントに深掘りしたが、本書は市場と共同性の関係性を巡って、様々な思想家たちがどのように考えてきたのかという点に関して、幅広く討究したものである。

近年の我が国でも盛んに唱えられている雇用の流動化なり自己責任論なりの根底にあるのは、アトミスティックな近代経済学的思考様式であり、それと親和的な1990年代より続くアメリカ流のグローバリズムの思想潮流であったと言ってよい。本書は、何故にアメリカ的なるものがグローバル化しえたのかという点について、価値相対性や無歴史性などをキーワードに思想的に考察し、それに対して、歴史性や文化、共同性と結びついた市場社会の在り方を、様々な思想家の政治経済思想を読み解く中で構想しようとしている。

アメリカン・グローバリズムは世界的な自国第一主義の隆盛によって終焉を迎えたのであり、論ずる意味がないという向きもあろう。言うまでもなく、15世紀から始まる大航海時代以来、二度の世界大戦などの紆余曲折を経つつ、基本的に資本主義はグローバル化してきた。今日がその紆余曲折の段階にあるのは確かだとしても、イデオロギーとしてのアメリカン・グローバリズムが本当に再起不能となったかどうかは軽々に判断できまい。そうした今日の世界の政治経済思潮を考えるためにも本書は役立つはずである。

著者より



ミネルヴァ書房
3,080円（税込）
刊行日 2022年3月

映画はいつも「眺めのいい部屋」
政治学者のシネマ・エッセイ

村田晃嗣（むらたこうじ）（大学法学部教授）著

映画については、様々な優れた分析や批評がある。

本書は、あくまで気軽なエッセイである。ただし、政治学者として、政治現象と映画の関係には、それなりに注意を払ったつもりである。文化と政治の関係は複雑である。権力を一方的に批判することを自己目的にするような映画論とは、一線を画したかった。

例えば、1954年に公開された黒澤明監督『七人の侍』（東宝）は、貧しい村人たちが七人の侍を用心棒に雇って山賊から村を自衛する物語である。つまり、自衛の重要性が謳われている。同年公開の木下恵介監督『二十四の瞳』（松竹）は戦争に人生を翻弄された小学校の教師と12人の教え子たちとの心の交流を描いている。そこには、二度と戦争はご免だという強い厭戦感情が流れている。また同年の本多猪四郎監督『ゴジラ』（東宝）は何者であろうか？放射能を帯び、東京を破壊しつくす怪獣は、アメリカの隠喩ではないか？これらの作品は、われわれにとって「あの戦争」とは何であったのか、そして、われわれにとってアメリカとは何者か、という深刻な問いを突きつけている。1954年に自衛隊が発足していたことも、決して偶然ではなかろう。実は、70年近く前のこれらの問いに、われわれはまだ十分に答えられてはいない。

もとより、もっと気楽に映画の中の王様たちや神話を比較したり、親子関係を国際比較してもよい。映画はわれわれの記憶を刺激し、想像力を喚起する。この作品を最初に誰とどこで観たのか？そうふり返るだけで、人生が豊かになってくる。だから、映画は「いつも眺めのいい部屋」なのである。

著者より

アルテスパブリッシング
2,200円（税込）
刊行日 2022年5月

梨の形をした30の言葉
エリック・サティ箴言集

椎名亮輔（しいなりょうすけ）（女子大学学芸学部教授）著

「人間を知れば知るほど、犬が好きになる」、「われわれの情報は不正確であるけれども、われわれはそれを保証しない」、「ピアノは、お金と同じで、それに触っているものにしか嬉しくない」。これらの言葉を残したのはだれでしょうか。「私の名前はエリック・サティ、みんなと同じように」。

曲名は知らないけれども、メロディーはだれでも知っている《ジムノペディ》や《あなたが欲しい》を書いた作曲家エリック・サティ。彼はまた、このような一風変わった言葉を残したほか、一年中同じ服装でいたり、貧乏なのに高級な傘やハンカチを集めたり（雨がふってくると傘を守るためにコートに入れていました）、奇矯な行動でも知られていました。この本は、そうした彼のおもしろい言葉を集めて、その背景について詳しく説明したものです。

彼を取り巻く芸術家たちの時代や地域ごとに異なるネットワーク、パトロンとしての上流階級の人々、天敵としての批評家（裁判沙汰にまでなります ― 彼のほうが訴えられるのですが）、移り住んだパリ郊外御近所の一般庶民の人々（とくに子供たち）、それらとの関係性のなかで浮かび上がるサティの人間像がありました。そしてそこには首尾一貫した音楽芸術についての思想があることがわかりました。

また同時に、もっと深く知りたい人のために役立つよう、現在日本で入手可能な文献を網羅した詳細な参考文献表を付すなど、サティ研究最前線紹介もしています。

著者より

新典社
3,300円（税込）
刊行日 2022年7月

『源氏物語』の時間表現

吉海直人（よしかいなおと）（女子大学表象文化学部 特別任用教授）著

本書は『源氏物語』を核として、平安時代文学の時間表現について論じたものである。その前提として、平安時代の暦は旧暦（太陰太陽暦）であり、現在の太陽暦とは概念がことなっていること、また平安時代は一日が定時法で均等に割り振られていたが、江戸時代に不定時法が取り入れられたことで、かなりの時間のずれが生じている。それが古典文学の解釈を誤らせている可能性があることを警告してみた。

全体は三部構成になっており、序章として「時間表現の落とし穴」で時間表現を誤解している恐れがあることを喚起してみた。第一部は「平安時代の時計」として、宮中の「時奏」、「鶏の声」、「鐘の音」についてまとめ、具体的に『枕草子』二九三段を例にして日付変更時点について論じている。

第二部は「平安時代の時間表現」として、小林賢章氏の御論を顕彰し、それをもとに時間表現としての「暁・朝ぼらけ・あけぼの・しののめ」の問題点を論じ、さらに「ほのぼのと明く」、「夜更け」、「夜をこめて」についても論じてみた。

第三部は「『源氏物語』の時間表現」として、桐壺巻・賢木巻の時間表現を論じ、「あさけの姿」についての私見を述べた。付録として、今後の研究の参考に「時間表現に関する語彙の論文目録」を載せた。『源氏物語』のみならず、平安時代の物語・和歌における時間表現の重要性に気付いていただければ幸いである。

著者より